田嶋智太郎のFXレポート☆彡　　２０２５年０７月２４日更新分

■　対円・対ユーロで一旦はドル安方向…

前回更新分の本欄では、ドル／円、クロス円について「戻り売りの好いタイミングを計る心積もりをしておきたい」と述べた。ドル／円の目先の上値の目安については「２００日移動平均線（２００日線）から１５０円手前あたり」としたが、実際、ドル／円は２００日線に近づくほど上値が重くなり、昨日（２３日）は一時的にも２１日移動平均線（２１日線）が位置するところ（現在は１４６．２２円処）まで下押す動きが見られている（左図参照）。

ちなみに、２００日線は１８日を境に下向きに転じており、有名な『グランビルの法則』で言うところの「売りサイン」が灯ることとなった。

むろん、当面は２１日線をクリアに下抜けるかどうかが一つの焦点で、仮に下抜けると７月１日安値から１６日高値までの上昇幅に対する５０％押し＝１４５．９３円処、６１．８％押し＝１４５．１６円処などが意識されやすくなるものと見られる。実際、２１日線の付近では仕掛け的にまとまった売りを持ち込む動きも見られており、本稿執筆途中にドル／円は大きく節目を割り込む動きとなっている。なおも、当面の下値リスクには十分に警戒しておきたい。

周知のとおり、日米間の関税交渉が今週２２日、ついに合意に至った。トランプ米政権の発足前と比べて関税負担が重くなることはなおも解せない大問題だが、ようやく“霧が晴れ始めた”ということだけは間違いのない重大なポイントである。

複数の外交筋によれば、欧州連合（ＥＵ）も米国との間における１５％の関税合意に近づいているとされており、そうなると一つに関税が米インフレに及ぼす影響の度合いなどが、これまでよりもずっと想定しやすくなる。その結果、米連邦準備理事会（ＦＲＢ）や欧州中央銀行（ＥＣＢ）、日銀も当面の政策方針を定めやすくなり、市場でも徐々に各通貨ペアの方向性というものがぼんやり見えてくるようになるのではないか。

さしあたり、ユーロは対ドルで上値余地を探る展開になりやすいと見られる。本日開かれるＥＣＢ理事会では政策の据え置きを決定することがほぼ確実視されており、目下の市場の関心は９月利下げに関わる何らかのヒントが得られるかどうかにある。

むろん、明確なヒントが示されるわけもない。そんななかで、いよいよ米国とＥＵが関税交渉で合意したとの一報が届いたあかつきには、やはりユーロ／ドルが一旦強含みの展開になりやすいと見ておきたい。足元では再び２１日線を上抜ける動きとなっており、ひとまずは年初来高値である１．１８３０ドル処を試す可能性が高いと見る。ただし、年初から続くユーロ高について「その影響を危惧する」、「一段のユーロ高進行をけん制する」といったような意見が理事会で飛び出す可能性もないではないという点には一応注意しておきたい。

とまれ、一時的にもユーロ高・ドル安の傾向が強まれば、ドルは対円でもしばらく弱含みで推移する可能性があるということになる。一つの注目ポイントとしては、やはり石破首相による退陣表明の有無、あるいはその時期が重要となるが、それは早くとも参院選の総括をまとめる８月中ということになり、そうなると自民党総裁選は９月半ばまでずれ込む可能性もある。

その意味からすると、次期首相候補を誰彼と想定したうえで特定のポジションを構築するのは、いまだ時期尚早ということにはなりそうである。ただ、過度に円高方向に傾くことも考えにくく、目先はドル／円の押し目買いポイントを探りたい。　　（０７月２４日　１０：４５）